
ライバルは17才 メチャクチャ成長が遅い私の記録 上

麻真

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライバルは17才 メチャクチャ成長が遅い私の記録 上

【Zコード】

Z4502D

【作者名】

麻真

【あらすじ】

高校を卒業できない夢に悩まされている臨時教師が、高校生と関わっていく中でいろんなことを学び、少しずつ成長していく話。高校生のバンドや、小さなわが娘に刺激されて、自分も音楽をやってやろうと思うけれど、なかなかうまくいきません。もたもたと前進し、チャンスをつかもうと頑張ります。

(前書き)

自分の体験をもとに、小説を書いてみました。登場人物にはすべてモデルがいて、名前は変えてあります。話がスムーズに進むように、できごとの順番を変えたり、創作した部分もありますが、ほとんどが実際にあつた話です。

出来上がって読んでみると、あまりの成長のトロさに自分で腹が立ちました。イライラするかもしませんが、最後まで読んでもらえるとうれしいです。私以外の登場人物たちは、きっと魅力的だと思います。

「え？高校に…ですか？」

突然かかつてきた電話で、四月から勤められる美術の教員を探しているからこないか、と告げられた。とある公立高校の校長先生からだつた。中学校には何度も臨時や講師で勤めさせてもらつたけれど、高校からの話は初めてだ。高校！ 教員を志したとき、夢にみた職場だ。中学生もかわいいけれど、もう少し成長して、夢も具体的になってきた高校生に、より魅力を感じる。特に、十七才という年齢に、執着ともいえる強いこだわりがあつた。もう三円半ば。こういう話は結論を急いでいるので、「少し考え方させてください。」などと言つてしまつたら、電話を切つてすぐ他の人をあたり、そちらがうんと言えば「もう別の方に決まりましたので…」ってことになる。今すぐ答えを出さなくては。いろんなことが一気に頭の中をかけめぐつた。私が高校で勤まるだらうか。今の仕事とかけ持ちできるだろうか。

今は一ヶ所の絵画教室と中学の非常勤講師をしているが、離婚して保育園児の一人娘を抱えている私にはかなり厳しい経済状態。時間割をうまく組んでもらえれば、なんとか今までの仕事にプラスできるんじゃないだろうか。最悪の場合、もう一年継続することになりそうな中学の方は、とりあえず三月いっぱいの契約だから、そこで辞めさせてもらうこともできる。中学は車で片道一時間の距離。しかもかなり雪の積もる場所だから、冬は一時間以上かかることもあつて、通うのが大変だつた。あの高校なら、うちから車で十五分。暖かい場所なので、雪の心配もいらない。なにより、私が一番関わったかつた高校生の中に入つていけるのだ。すべての条件が、引き受けろと言つていた。

「やらせていただきます！ よろしくお願ひします！」

「ああ、よかつた。では、手続きをさせてもらいますね。」

高校に勤められる！ 期待で胸が躍った。しかし、私は大きな勘違いをしていたのだ。

「今の仕事も続けられるように時間割を組んでもらえますか？」

早めにお願いしておこうと切り出すと、

「他の仕事はできませんよ。常勤で臨時の公務員になりますから。校長先生は、ちょっと困惑したように返事をされた。

「えっ？！ 時間講師の話じゃないんですか？」

今の中学生が時間講師だから、勝手に同じ条件だと思い込んでしまったけれど、この話は臨時採用の話だったのだ。

授業をした時間の分だけ時給をもらう時間講師と違い、臨採は正採用の先生たちと同じ時間働き、ほとんど同じ待遇になる。月給制度ボーナスまでもらえるのだ。今まで収入にならなかつた夏休みなどの長期の休みも、仕事をさせてもらえる。行事等で授業がいきなりカットされて、収入が減る心配をする必要もない。神様が困っている私に手をさしのべてくれたのかと思うほど、願つてもない話だ。だけど、この仕事を引き受けるということになれば、絵画教室をやめなければならない。そんなことは考えたこともなかつた。

「他の仕事が辞められないなら、しづくは他のかたを探さないといけなくなるんですが…」

「あ、いえ、勤めさせていただく方向で考えます！」

とつさに答えたけれど、頭の中はパニック状態だ。

正直、切羽詰まつたこの生活からは抜け出したいと思つていた。絵画教室をするなら実績を作らなくてはいけないと、先生に勤められて入つた絵の会。その活動を維持していくために、今の収入ではかなり無理のある金額を費やすなくてはならない。今住んでいる雨漏りのひどい古屋を買った時の借金も、まだ残つてゐる。高校に臨時で一年出させてもらえば、とりあえず借金は全部返せるだらう。でも絵画教室はどうしよう… 一ヶ所合わせると、三十人以上の生徒さんを放り出すことになる。こんなに急では、次の講師も見つかるわけがない。今月の教室はあと一回。今日を最後にもう来ません

なんて、どんな顔をして言えばいいのだ？

結局、絵画教室は「年をとつて遠くまで通つのがきつくなつたから」と、私に教室を譲つてくれた恩師にもう一度お願ひすることになり、中学にも事情を説明して急ぎよ他の先生を探してもらつた。あちこちに迷惑をかけ、教室の生徒さんを裏切り、私は四月から高校に勤めることになつた。

一生懸命こいでののに、自転車は前に進まない。今日は卒業試験だといつのに、遅刻してしまいそうだ。きつい登り坂、焦れば焦るほど車輪が空回りして、周りの景色は全然動かない。急がなきや！　私はなりふりかまわらず自転車をこぎ続ける。

どのくらいいたつたのだろう。汗だくになり、フラつきながら、なんとか高校の門をくぐつた。自転車置き場には誰の姿も見えない。試験はとっくに始まつているはずだから、急いで教室に入らなきや。自転車は止めたけど、あれ？　どこの教室で試験があるんだっけ？　今から受けるのは何の教科？　もしかして、何も勉強してきてないんじゃない…？　うわあ、どうしよう！

その場に立ちつくし、泣きそつになつてゐるといふので、つなされて目が覚めた。

まだ…。いつ頃からか、こんな夢をしおつかみつ見るようにになつた。卒業試験を受けれなかつたり、試験問題がぼやけて読めなかつたりして、高校を卒業できなくなる夢。実際には十七年も前に高校を卒業し、その後大学も卒業している。それなのに、夢の中ではいつも、私は高校を卒業できない。

高校時代が、今までの人生の中ですつとひつかつてゐることは、自分でもよくわかっている。特に十七才のときの自分には、特別な思いがあつた。何かがいまだに、そこで止まつたままになつてゐるのだ。わかっていても、いまさらどうすることもできないので、ずっとこんな夢を見続けてゐる。季節が一周するたび年齢は一つずつ増え続け、取り残された高校生の自分とのギャップはどんどん広が

つていいく。

フリーズしている私と同年代の高校生。そんな子たちと関わるチャンスを、やつと『えられたのだ。もしかしたら、止まっている時間動かすきっかけが見つかるかもしれない。逆に、自分には取り戻せないまぶしい時代を見せつけられて、悲しい思いをするだけで終わってしまうかもしれない。こんな私が、高校生と関わることでどう変化していくかは想像もつかないけれど、『えられたチャンスを無駄にしないように精一杯やってみよう。

新しい学校に勤めるときは、いつもワクワク半分、不安半分だ。臨時や講師を繰り返していくうち、慣れるのは少しずつ早くなってきたけれど、やはり最初は緊張する。今回は高校ということもあり、今までとは違った緊張感があった。

髪を後ろで一つにくくると、どうもおばさんくさい。美容院に行くお金がなくてほつたらかしにしていた髪は、腰を通り越してお尻のあたりまで伸びていたのだ。これから若い子とつきあつていくのだから、私も若返ろう。何年かぶりに美容院に行き、長い髪をバサリと切った。

そして、初めての出勤。春休みなので授業はないけれど、クラブなどで、生徒はたくさん登校していた。車を降りて玄関に向かっていると、

「おはよっござります！」

全く見たこともないはずの私に、男子生徒が大声であいさつしてくれる。

「おはよっござります。」

ちょっとビックリしながらあいさつを返すと、次にすれ違う生徒がまた、

「おはよっござります！」

と元気よく行き過ぎる。ちょっとだけた感じはするけど、裏表のない印象の生徒たちだ。この学校、好きになれない、それがこの高

校の第一印象だつた。

春休みが終わり、始業式、そして入学式。次々に会う生徒たちはみな、それぞれの高校生らしさを全身から発している。これから始まる生活が、ますます楽しみになつてきた。

初めての授業は三年生。一限目から一時間続きの授業だ。美術選択者の名簿には五人の名前があった。どんな子たちなんだろう。かなり緊張して、美術室で待つていた。

女の子がひとりやつてきた。標準的な制服がよく似合つ、落ち着いた印象の子だ。

「おはよう」

声をかけると、にっこり笑つて

「おはようございます。」

と返事が返つてくる。よかつた、話ができるそうだ。ホッとしてるとチャイムが鳴つた。最初が肝心だから、チャイムと同時に挨拶をして、まずは自己紹介のはずだったんだけど……なんで一人しかいないの？？

「五人いるんだよね？」

「うん。みんなそのうち来るよ。」

「あ、そう……じゃ、みんなが来るまでちょっと待つてようか。」

「全員そろうのは、次の時間になるかもしないよ。みんな朝弱いから。」

いつものこと、といつよいに、彼女は明るく言つた。

「……はあ。」

「スケッチブックに絵を描いててもいいかな？」

「そ……だね……」

張りつめていた緊張の糸が、ブチブチ音をたてて切れてゆく。これが高校最初の授業……って、授業にならないし！

仕方がないので、絵を描いてる彼女とお互い自己紹介をし、雑談しながら時間を過ごしていると、二人目が現れた。肩のあたりです

いたストレートヘアがきれいな女の子だ。名簿に女子は一人。最初に来たのがミカちゃんだから、この子はサオリといつ子らしい。

「おはよ。」

「おはよ。」

声をかけると返事は返ってきたが、私と目を合わせることもなく席に着く。そしていきなりカバンから鏡を取り出すと、髪をとき始めた。一瞬、え？と思つたが、注意して効果があるのは人間関係ができてから。初対面で説教してもいいことにはならないので、こちらも彼女の態度を無視して勝手にしゃべつた。

「今年美術を担当することになったアサマです。よろしくね。」

「よろしく。」

視線を鏡に向けたまま、彼女はぶっきらぼうに答えた。語気の印象以上に冷たく感じるのは、整った顔立ちのせいかもしない。

「みんながそろつまで、スケッチブックに好きな絵を描いてね。」「ふん。」

短い返事をすると、彼女は鏡をしまって無表情のま立ち上がり、後ろのロッカーにスケッチブックを取りに行つた。あとは男子三人。いつたいいつやつてくるんだろう。

二人のスケッチブックにそれぞれの世界ができあがつてきた頃、勢いよくドアが開き、男子が一人入ってきた。

「おっはよおう！」

何かうれしいことでもあったのか、片手を挙げ、満面の笑顔。まつすぐにそろつた前髪が印象的だ。

「おはよ、シンタ。」

「タケシとカツヤ、まだ来てないの？」

「まだ寝てんじゃないの？」

スケッチブックから目を離さず、サオリが答えた。

「電話してみようか。」

シンタと呼ばれた子は、ポケットから携帯を取り出ると、いきなり電話をかけ始める。

「もしもしシタケシ？ 今日学校来るよね？ 今ビニ～。」
校内で携帯を使用することは校則で禁じられているはず。もちろん授業中の使用なんて、もつてのほかである。

「もうすぐ来るって。」

「あ、そう。」

目が点になるような出来事が続き、驚きの感情もなくなつてくれる。
今日はこの子たちの様子を見るだけで終わりそうだ。

「先生、新しい美術の先生？ 名前は？」

三回目の自己紹介をしていると、電話の相手、タケシがやつてきた。
やせていて鋭い目、今風にカットされた髪は少し茶色く、一見恐い
感じの印象を受ける。

「新しい美術の先生だつて。」

私を指差して、シンタが言つた。

「見りやわかるわ。」

タケシの返事はそつけない。

「名前はねえ……なんだつたっけ？ あ……」

「……アサマです。ヨロシク。」

自己紹介もだんだん雑になつてくる。まだ一人来ていなideど、そ

こで一限目終了のチャイムが鳴つた。

「はい、休憩しよう……つて何やつたんだかわかんないけど。」

「休憩、休けーい！」

シンタが踊るように教室を出て行つた。私もちょっと準備室に戻つて気持ちを整理しよう。幸い私には、環境の変化にすばやく適応する能力は備わつてゐるらしい。十分間の休憩があれば、自分が置かれている状況を消化することができるだらう。

二限目のチャイムが鳴つて教室に戻ると、シンタが誰かと話しながら廊下を歩いてくる声が聞こえた。どうやら最後の一人も来たらしい。ミカちゃんの予想通り、全員そろつたのは本当に二時間目だ。

「カツヤも来たよオ。」

「ああ、眠い！ なんで朝から美術なんかやんなきゃなんねえんだ

！」

入ってくるなり、大机の上に整然と並んだボンドやステイックのりをいじっては、好きなところに放り投げる。なんだ？この意味のない行動は。体格がよく、制服を着ていなければ社会人に見えそうな外見とはうらはらに、やることはかなり幼稚だ。もう何があるても驚かないと思っていたのに、挨拶するのも忘れて、しばらくぼう然とその行動に目をうばわれてしまった。

「先生、みんなそろつたけど、何するの？」

ミカちゃんの声で我にかえる。

「あ、そうだね。今日は最初の授業だから、簡単なデッサンをやってみよう。みんな、スケッチブックを用意して。」

「スケッチブック？ そんなモノ、どこやつたか忘れたわ。教室の中を無駄にうろつきながら、カツヤが言つた。

「オレも。」

「ボク、全部落書きして、もう白いといいよ。」
と、笑顔でシンタ。

「…じゃ、画用紙持つてくるから、ちょっと待つて。」
私は準備室に画用紙を取りに行く。

週に三時間あるこの授業、これからいつたいどうなるんだろう。まともな授業はできそうにないけど、たいくつしない一年になりそうだ。

ミカちゃんとサオリは美術部員だそうだ。美術部には他にも三年の女子が数人いるらしい。

私には一年生の副担任という役割があてられた。その一年生、女子が特にパワフルで、入学して間がないのに、もう二年に負けないくらい服装が崩れている。目立つ子たちはどちらかというと男勝りなタイプが多く、そんな女子に押されて、男子は一步引いてる感じだ。グリとヤスコ、ヒカリにアカネと、元気のいい子たちがたくさん美術を選択していて、一年の授業はとにかくにぎやかである。

「先生、定規とつてえ。」

「はい、はい。」

「鉛筆忘れてきた。せんせ貸してー。」

「はい、どうぞ。」

「先生つてパシリみたーい。」

ときどきムツとするけど、「こんなことで腹を立てていたら神経が持たない。

「一年のあいつがうちからのことにならんでくるんだよ、アタマ来るー。殴りこみかけようか。」

と、グリ。廊下にたむろして、先輩が通れなくともよけないんだから、にらむのも当然だろう。上級生が寛大だから、にらむだけですんでいるのだ。普通の場合、やられるのはあんたたち。じつは自分たちの立場が全くわかっていない。

「あの子は悪い子じゃないよ。」

マコという子が口をはさんだ。目がパッチリ大きく、笑顔のかわいい女の子。今年一度目の一年生をしているので、一年生は去年の同級生なのだ。明るい子で、一年の中でもそれなりに調子を合わせている。新入生のアカネと前からの友達らしく、それも個性の強い一年に早くなじめた理由のひとつかもしれない。他の授業は寝ていたりサボったりするらしさのだけれど、美術は休まず出てきて楽しそうにやっている。

「ねえ、お母さん…あ、間違えた！」

「え？ 私のこと？」

「ゴメン、せんせえ。」

ヒカリが照れて舌を出した。

「こんなデカイ子にお母さんなんて言われたらショックだわ。」

「先生つて、年いくつ？」

「三十五だよ。もうすぐ誕生日がきて三十六になるけど。」

「じゃ、私のお母さんといっしょだね。」

そう言つたのはマコだった。

「いつしょ？お母さん、若いんだね。」

「十九で私を生んだからね。」

「十九で？そのくらいで親になる人は結構いるよね。マコと十九離れてるということは、一年生たちとはちょうど二十才離れているということになる。ショックだなんて言つたけど、親子でも全然おかしくないじやない。若いつもりでいたのに、私はもうそんな年になっていたのだ。『お母さん』と言われたときより数倍大きなショックに襲われた。

その頃から、マコとアカネが美術室に来て、一緒に昼ごはんを食べるようになつた。どちらか、または一人とも、お弁当を持ってきていないことがあり、私がとつてている日替わり弁当を分け合つて食べることもあつた。

「なんでお弁当持つてこないの？」

「うちら、施設にてさ、お弁当は作つておいてあるけど、自分で弁当箱に詰めなきゃなんないから、めんどくさいんだよね。」

「せっかく作つてもらつてるのにもつたいけない！お腹すくでしょ。」

「まあねえ。」

「美術は休まず出てきてるけど、他の教科はどうじてるの？欠課が多いって聞くけど。」

「あんまり出てないね。遅れて行つたり、途中で抜けることもあるし。」

「また進級できなくならない？」

「別にいいかな。学校やめようかつて、いつも思つてるし。」

「そなんだ。学校やめて、何かやりたいことあるの？」

「別に。仕事してお金ためて、一人暮らしするかな。」

「一人で家賃払つて生活するのは大変だよ。」

「そうかもしけないけど、いっぱい人がいると、いろいろあつて疲れるんだよね。」

「そつそつ。」

アカネもつなずく。

「マコはどんな仕事したいの？」

「接客とか好きかな。」

「向いてるかもね。まあ、慌てて結論出さないで、ゆっくり考えてみたら？ やめようと思えばいつでもやめられるけど、早まつたら元には戻せないからね。」

「うん。そうするよ。」

全く言ひことをきかないと、先生たちからは評判が悪いけれど、話してみるとすくなく素直な子だ。学校という場所と歯車がかみ合わないだけなんじやないだろうか。

何日かして、マコがシャツの形に折りたたんだ手紙を持ってきた。

「あとで読んでね。」

「わかった。」

その手紙には「こんな」と書いてあった。

?」の前先生に「学校やめて何したい？」って聞かれたよね。あれからずっと考えてたんだけど、私はお母さんになりたい。子供をうんでも、かわいがって、あつたかい家庭を作りたい。今は彼氏もいないし、すぐには無理だけど、いつかきっといいお母さんになるよ。見ててね。マコ？

いつも明るくふるまつていて、寂しさなんて感じさせないようにしているマコ。施設で暮らすあの子にとって、一番欲しいものは家庭なのだ。あせらなくとも、きっとマコはいい家庭を作るよ。読み終えた手紙を元のシャツの形に戻そとしたけど、どうしてもできないのであきらめた。

私の娘は五才で、ミヒロといつ。私が子供の頃とは正反対の性格で、何にでも興味を示し、かたっぱしからやってみたがる。おかげで、私はこいつが生まれてから、今まで自分とは縁がないと思っていたたくさんの世界に足を踏み入れることになつた。

たとえば、運動オーナーの私には関わることもないと思つていたスキー。ミヒロがやつてみたいと言つので、二年前いつしょに始めてみた。すると案外おもしろい。ミヒロにせがまれなければ、私はその楽しさを一生知らずに過ごしちだらう。好奇心がなかつたために、私は今までどれだけ損をしてきたのだろうか。

ミヒロは、四才になつた頃からタレントスクールに通つている。子供に変な期待をしてバカな親だと思われるかもしぬないけれど、三才のとき、本人がテレビに出たいと言つたのだ。

「どうやつたらテレビに出られるの？」

身を乗り出して聞くミヒロに、

「テレビの裏のフタを開けて入るんだよ。」

と、「冗談で」とまかすと、

「もあ！」

ヤツは怒つて、私に向かつて小さなこぶしを振り回した。こいつは本気だ、その時感じた。

「ホントはどうやつたらいいの？」

「テレビに出る勉強をするところに行かなきゃならないかな。」

「じゃあ、そこに行く！」

わが子が初めて自分からやりたいと言つたことだつた。子供の気まぐれでもなんでも、やりたいということはひと通りやらせてみたかった。私だけの収入で、そんなところに通わせるのは無茶かとも思つたけど、なんとか切りつめて一年半続けている。高速バスを使つて、片道一時間。小さな身体にはきついはずだけれど、やめたいと言つたことは一度もない。

私が習つていなくて後悔したピアノも、同じ時期から習わせている。発表会などで何度もステージに上がる機会があつたのだけれど、そのたび舞台度胸のある子だと人に言われた。まだ人前で演じる意味がわかつていなかつていいせいか、全く緊張せず、人に見られることが楽しくてたまらないという笑顔を見せるのだ。この子は「こうすることが向いているのかもしない」

「ヒロには小さいうちからいろいろなことを経験させて、自分を生かせる場所を早く見つけてほしいと思っていた。父親がいないことをコンプレックスにして、ちぢこまつた性格になつてほしくないし、「お母さんが苦労して育てくれたから、一生お母さんの面倒見なきや」なんてプレッシャーを感じてほしくもない。もし、早く何かを身につけて自分で稼ぎ、「自分の生活費は自分で稼いできた」と言えたら、私に遠慮せず、自分のことを一番に考えて生きていくことができるだろう。私自身も、子供のためだけに身を粉にして働くような親にはなりたくないから。お互い自立して、向きあえる親子でありたい。

「将来のために、今はガマンする」という生き方を、ヒロにはさせていらない。今やりたいことがあるなら、それを一生懸命やればいいと思っている。大人になつて始めたのでは手遅れなことが、この世にはたくさんある。自分と同じ後悔を、子供にはさせたくないのだ。もちろん将来も大切。だけど、今を一生懸命生きている人は、自然といい未来がやってくると思つ。未来というのは今の続きなのだから。

「パソコンで絵を描きたいんだけど、どうしたらいいの?」

サオリが私に聞いてきた。パソコンか。機械は苦手で、使い方がよくわからない。とりあえず準備室に行つてパソコンの電源を入れ、正直に言った。

「実は、私もパソコンで絵なんか描いたことないんだよね。」

「先生のくせに、役に立たないんだから。」

全くその通り。大学を卒業する頃、初めてワープロを見て驚いた世代の私には、パソコンなんて異次元の物体。今どきパソコンを使えなくちゃどんな仕事もつとまらないから、これから勉強するしかない。

「一緒にやってみようか。」

「しょうがないわね。これがお絵かきソフトよね?」

「…たぶん。」

聞くだけ無駄なのを察したサオリは、自分であれこれ操作して、絵を描く画面を出した。マウスを動かし、線を引いてみているけど、思うところに線が引けない。

「むずかしい。もつといい方法ないのかな。」

「そこにあるのがスキヤナつてやつだよね？ それ使ってみれないかな…」

教室のほうでは、カツヤが遅刻してきて何か叫んでいる。

「うるさいな。ちょっとあっち見てくるわ。」

「どうぞ。どうせじても役に立たないし。」

返す言葉もない。

「うわあ！ やつちまつたあ！」

「なにをやつたの？」

「もうすぐ母の日だな、なんかプレゼントする？ ってクラスのヤツに聞いたら、『うち、母親いないんだ。あ、気にしないで。』って、気にするだらうが！ うわあ…」

クラスメイトを傷つけてしまつたことを後悔して、叫びまわつてゐらしい。また、ボンドやステイックのりが宙を舞つて床に散らかる。

「もう言つちやつたもん仕方ないじゃん。」

黒板に落書きをしながらシンタが言つた。

コイツらは子供っぽいいたずらはするけれど、弱いものをいじめたり、わざと人を傷つけたりすることはないだろう。いたずらのあと片付けをするのは面倒だけど、まあ、こんなのはかわいいものだ。

「文化祭の曲、何にする？」

「おれはこないだの曲がいいと思うけど、ケンがいやだつて。」

「じゃ、アレは？ 昨日のテープに入つてた…」

この学校は六月後半に文化祭がある。「ゴールデンウイークも終わり、あちこちで文化祭の話が出始めていた。

「文化祭で何かやるの？」

「ライブ。俺がギターでこいつがドラム。」

カツヤを指差し、タケシが答えた。

「へえ、バンドやつてるんだ。」

「オレがバンドのリーダー。」

自慢げにカツヤが言った。え？ じいっがリーダーで、ちゃんとまとまるんだろうか。そのバンド、ぜひ見てみたい。ドラム叩きながら、物投げてたりして。

「シンタも一緒にやつてるの？」

「ボクは何もできないから見る人！」

そんな会話を聞いていたミカちゃんも、「美術部もそろそろバザーのしたくしなきゃいけないな。」と、パソコンと格闘しているサオリのところに行き、文化祭の相談を始めた。美術部は毎年、作品の展示と一緒に、アクセサリーなどの小物を作つて売るらしい。

「今日、部員全員で集まろうか。」

いつもは活動してるとかどうかよくわからないクラブだけど、文化祭前は活発になるようだ。

文化祭が近づくにつれ、学校の中はかなり活気づいてきた。美術部も連日残り、展示用の作品やバザーの小物を作つてている。と言つても、家で制作してる子もいるから、毎日残つてているのはミカちゃんとサオリだけなのだけれど。冷たい印象だったサオリが「最後の文化祭だから」を連発し、一番熱くなつてゐる。相変わらず言葉はぶつきらぼうだけど、周りに気を配つてゐる場面もよく見かける。やさしさを人に見せることに照れていて、冷たい態度になつてゐるのかもしない。複雑な精神構造だ。

ついに文化祭がやつてきた。狭い男子更衣室でやつてゐる美術部のバザーにも、けつこう人は入つてくる。広い部屋も空いてゐるのに、美術部員がわざわざこの小汚い部屋を選んだのだ。服を入れるボックスが、展示に使えて便利がいいという理由だった。バザーの店番にずっとついているつもりだけれど、カツヤたちのライブは見に行ってみたい。サオリが行くと言つていたから、ついて行ってみ

よ。

「そろそろだよ。」

サオリが声をかけてくれた。お客様の間をくぐって、更衣室を抜け出す。

体育館に入ると、ステージの前にたくさんの生徒が立ち、飛び跳ねていた。へえ、これが高校生のライブか。演奏してるのは知らない子たち。ギターやドラムのことはよくわからないけど、歌はそんなにうまくはないかな。そのバンドが終わり、次に出てきたのがカツヤたちのバンドだつた。ボーカルの子が美形で人気があるらしく、結構な声援だ。演奏が始まると、いつもわけのわからない行動ばかりしているカツヤが、真剣な顔でドラムを叩き始めた。あいつがみんな顔をするときがあるんだ。体格がいいから、音に力があり、迫力もある。なんだか別の人間を見ているようだつた。

今ステージの上にいるのは、まぎれもなくあのやんちゃ坊主たち。何の気力も感じさせない授業中の姿とは違い、ここではちゃんと生きている。照明はたいして強くもないのに、ステージの上は妙にまぶしかつた。

何曲かやらしさかつたけど、一曲聴いたところで、バザーが気になるから帰るとサオリに告げ、体育館を出た。本当は急いで帰る必要なんてない。よくわからないけれど、それ以上そこにいたたまれない何かを感じて、早く外に出たかったのだ。

更衣室に戻つてバザーの店番をしていると、あつという間に時間は過ぎ、閉会式がやつてきた。まだ高い陽の下、何日もかけて作つたものたちがゴミ捨て場に運ばれていく。お祭りの後はいつも、心のどこかにポツカリ穴があいた気分になる。

文化祭も終わり、ちょっと疲れの残る日常が戻ってきた。ホッと一息ついたら、今度はすぐに期末テスト。学校という場所は、退屈する暇がないようにできている。

文化祭のドサクサで昼休みもバタバタしていたので、久しぶりに

マユたちと食べるお昼ごはんだ。

「先生つて、お母さんみたいだよね。ママつて呼んでもいい？」

突然、マユが言った。

「え？…いいよ。こんな頼りないのでよければ。」

「ママになつたら、私と一緒に暮らさないといけないんだよ。」
私は黙つてそつと笑つた。できることならそうしたいくらい、私はマユがいとしくなつていた。でも、それはできないし、マユももちろん、無理なことはわかつて口にしている。もし状況が許したとしても、そんなことをしていい結果にはならない。

七年前、私は両親を亡くした卒業生と結婚し、一年後泥沼の離婚をした。子供ができるとわかつたときには別居していて、生まれてすぐ離婚届を出したから、ミヒロは父親の顔を見たことがない。それから一度も会つてないし、連絡先も知らない。振り込むといつていた養育費も、一度も振り込まれたことはない。

先生と生徒という関係は、いつまでたつても変わらない、とてもいい関係だ。その距離を崩さずにいたなら、今でも会えれば

「よつ！ 元気？」

と声を掛け合える関係が続いていたはず。相手のだらしなさだつて、自分に降りかかってこなければ許せただろう。人間関係をいい状態で保つには、近づきすぎないことが大切だと思い知らされたできごとだった。私にはミヒロという道連れができたのだから、結婚したことは後悔していないけれど。

昼食を終え、用事があつて職員室に入ると、ちよつゞマユの話が出ていた。

「これからもずっとあんな態度じゃ進級もできないし、どうしたいのか本人と話してみないといけませんね。」
なんだか深刻な感じだ。

「放課後呼んで、話をしてみます。」

若い担任の先生は、そう言うとため息をついた。

次の日、お昼ごはんを食べ終わつて一息つくと、マユが言った。

「ママ、私、学校やめちゃつてもいいかな。あと二年も「」で頑張る気になれないんだ。」

あのあと担任に呼ばれ、今後のことを考えてくれるよつて言われたらしい。少し目が赤いのは、ゆうべ眠れなかつたせいだらうか。

この子は悪い子じゃない。学校という場所とはかみ合はず、邪魔者扱いされてしまうけど、この子が必要とし、必要とされる場所がどこにあるはずだ。その場所を探してみるほうがいいのかもしない。

「自分でよく考えた結果なら、それがいいかもしないね。」

そんな話をし、マユが学校をやめる気持ちを固めていたときだつた。授業中先生の指導をきかなかつたことをきっかけに、マユを家庭反省させ、今後のことを考えさせることが決まつた。こういう状況になつて、教室に戻つてくる子はないらしい。

「施設の先生が迎えに来て、泣きわめきながら引きずられて帰つたよ。」

そのとき一緒にいたアカネが話してくれた。ショックだつた。

学校に未練なんかないと言つていたマユ。気持ちを整理したつもりでいたのだろうけど、自分でも気づかない心の底に、ここでみんなど過ごしたい気持ちが、まだいっぱい残つていたのだ。やめたいならやめてもいいなんて言つてしまつた私は、間違つっていたんじゃないのか。学校という型にはまる努力をしてみると言つた方がよかつたのかもしれない。私はマユの気持ちなんか、何ひとつわかつてなかつたのだ。なんの役にも立てなかつた自分が、すぐ情けなかつた。

マユのいないお昼ごはんは味気なく、なかなかのどを通らない。そのうちアカネも友だちとお弁当を食べるようになり、美術室には来なくなつた。

週に一度総合学習の時間があり、三年生が六つの講座の中から好きな講座を選んで学習するようになつていて。三、四人の教員で一

つの講座を見ていたい、私は「創作・つくる」という講座の担当だ。

その時間、教室の真ん中あたりの席で、ゲゲゲの鬼太郎みたいな髪型の男子が毎回寝ている。この講座を担当する他の先生たちも、たまに背中をつついてみるだけで、無理に起こそうとはしていない。起こしたら暴れる子なのかもしれないし、今年来たばかりで様子のわからない私がでしゃばらない方がいいだろう。気にはなるけど、そんなわけで、声をかけてみたことはない。

これだけ爆睡するんだから、夜寝てないんだろうな。いつたい何をしてるんだろう。計画表の「作るもの」の欄には「黒い衣装」と書いてある。デザイナーでも目指してるのがかな。

「沼田くんて、プロのミニアジシャンになりたいんだってね。」

「へえ、そうなんだあ。」

女子が噂をしているのが聞こえてきた。ゲゲゲの鬼太郎のことだ。なるほど、黒い衣装はステージで着るためのものか。どんな音楽をやつてるんだろう。プロになりたいというからには、うまいのかな。ちょっと聞いてみたい気がする。

夏休みに入った頃、退学手続きをすませたマコから、久しぶりに電話がかかってきた。

「バイト決まったよ。パスタのお店なんだ。食べに来てね。」

変わらず元気そうで安心した。

「三年の沼田くんもそこでバイトしてるんだよ。」

「沼田くんて、ゲゲゲの鬼太郎みたいな頭した子？」

「そうそう。音楽やるのにお金がいるんだ、って頑張ってるよ。」

「へえ、あの子バイトもしてるんだ。好きなことを追いかけるために頑張ってる姿が、妙にうらやましかった。」

文化祭でカツヤたちのライブを見たときにも、似たような気持ちになつた。あんなちゃんとほらんなやつらでさえ、本気になれるものを持っている。私はあの子たちの倍の時間生きてきたけど、あんぶくに田を輝かせて何かに向き合つたことはない。

もう一度高校生に戻れるなら、私も音楽がやりたい。ミヒロや高校生たちを見ているうち、そんなことを考えるようになつていた。

小学校五年生の時、いとこがギターを弾いてるのを見て自分も欲しくなり、小遣いを貯めて買った。暇さえあれば持つて遊び、基本的に樂器のない生活をしたけど、やはり音が出るものがないと息苦しい。自分で稼ぐようになつてから、ボーナスをはたいて電子ピアノを買った。ほんとは本物のピアノが欲しかったのだけれど、学校を転々とし、引越しの多い生活だったから、仕方なく妥協したのだ。ギターもピアノもたいしてうまくはならなかつたけど、音を出していると心が和んだ。曲作りのまねごとをしていたこともある。どちらかというと、絵よりも音楽の方がいつも私の身近にあつた。

コンサートに行くのも好きで、特にシンガーソングライターの人生き方には共感することが多い。若い頃、もし身近に音楽をやっている人たちがいたなら、私もやつっていたかもしれない、この頃そういう思うことがある。だけど、周りにそういう生き方をしている人はいなかつたから、ステージの上にいる人たちは別世界の人間でしかなかつた。もちろん自分が人前で演奏するなど、考えたこともない。こんな年になつて、もしも…なんて言ってみても、私の人生が何か変わらぬわけでもない。

「イベントが近いから、自分の子がダンスを覚えてるかどうか確認するために、レッスンの見学に入つてください。」

タレントスクールの先生に言われ、レッスン室に入つた。みんながダンスをしている部屋の隅で、一人全く違う行動をしている子がいる。…あれはミヒロじゃないか！ 指示を聞かないのはいつものことだからと、先生もさじを投げてほつたらかしている状態のようだ。一瞬、頭の中が真っ白になつた。高い月謝と交通費を払つて、いつたいこいつは何してるんだ。そばに行つてひっぱたきたい衝動に駆られたけれど、先生の手前、そんなことはできない。帰りの高速

バスの中でどう説教しようかと、そろばかりが頭の中をぐるぐる回る。

いまさら何を頑張つても、手遅れな私。だけどこいつは、これらどんな未来でも夢見ることができる。そのために精一杯の環境を作つてやつているのに、なんでこいつはそのチャンスを自分でつぶすんだ。私がミヒロだったら、こんなもつたいいことなんかしない。人よりたくさん練習して、うまくなるうと努力する！ 精一杯手を伸ばして、つかめるものは全部手に入れようとするはずだ。私がミヒロだったら…

整理できない怒りで頭の中が爆発しそうになつたとき、もう一人の冷静な自分がつぶやいた。

（何かおかしくない？ なぜこんなに苛立つてるの？ 誰に対して腹を立ててるの？ 誰が何をしたくて、何のために頑張らなきやいけないの？）

そうだ。私が苛立つている本当の原因は、ミヒロではない。ミヒロがたとえプロのミュージシャンになつたとしても、それはミヒロの人生であつて、私の人生じゃない。ミヒロが努力して、それが報われても、私自身が幸せになれるわけではないのだ。頑張りたいのは私。充実感を手に入れたいのは私。だったら私がやるしかないじゃないか。

自分は手遅れだから、夢を追う若い子たちのそばにいて手助けをすることで、その人生を生きた気になろうとしていた。高校生たちがバンドをしているのも、ミヒロがタレントスクールに通うのもそう。そして、その姿を間近で見ているうち、うらやましいのを通り越して、妬ましくなつていてる自分に気づいていた。そんな自分を仕方ないと思つてきたけど、私が音楽をやつちやいけない理由が、いつたいどこにあるというのだろう。

ミヒロが生まれてからつい最近までは、時間もお金もギリギリの生活をしていた。ミヒロを育てることと、絵の会を続けることで精一杯。土日も関係なく働き、展覧会の準備や絵の制作に追われ、眠

る時間を確保することさえままならなかつた。でも今は週末が休みで、生活に困らないだけの給料も入つてゐる。やううと思えばなんだつてできる状況が、いつの間にか整つていて。できないと決めつけていたのは、ほかならぬ私自身。未来を自分で捨ててしまつたのは、ミヒロじやなく私の方だつたのだ。

なんだ、やればいいんだ。人が好きなことやつてる姿を、指をくわえて見てるなんてバカバカしい。こんな年になつて、いつたいどんなことができるかわからないけど、今できることから、とりあえず始めてみればいい。そう思つたら、一気に田の前が開けてきた。

バスの中で、今日の態度をひと通り説教したあと、

「お母さんも音楽やつてみようかな。」

ミヒロにさりげなく言つてみた。

「お母さんにはできないよ。」

ミヒロが返してくる。

「なんでそう思つんだよ。」

ムツとして聞いた後で、私が「お母さんはもつ手遅れだから」と言い続けてきた言葉を刷り込まれてゐるのだと気づいた。自分が口にした言葉だけど、人に言わるとカチンとくる。

「お母さんにだつてできるかもしれないじゃん。あんたより先にデビューしてやる!」

もちろんプロなんて考へていない。勢いでどんなことを口走つてしまつた。しらつとした顔で横を向いたまま、ミヒロがボソッとつぶやいた。

「フン……やるんなら本気でやれよ。」

「…………なあにイ?! なんで五才のガキにこんなこと言われなきやなんないんだ! わかつたよ! 本気でやつてやる!」

でも、考えてみれば、私よりこいつの方がよっぽどしつかり生きている。やりたいことを自分で見つけ、やりたいと意思表示して、実行に移してきているのだ。何もしない子供時代を過ごし、今また前を向いて歩いている若者を、指をくわえて眺めている私なんかよ

り、ずっと先を行つてゐるかもしない。ここにまで置いていかれたくない。私は真剣に焦つた。

やつてみようと決めたけど、さて、何から始めよ。詞を書くことも曲を作るのも好き、歌うことも好きなのに、なぜかこれまで自分の作った曲を自分が歌うとこうふうには結びついていかなかつた。自分の言葉を自分で歌うことは、なにか照れくさい感じがあつたのかもしね。だけど、その一つを結びつけることは、じく自然なことだ。それに挑戦してみよう。

曲作りなど習う場所が見つからないので、とりあえず通信講座のシンガーソングライターコースというのを受けることにした。大学時代にギターが壊れてから、十五年間一度も弾いていないのだけど、曲を作るならやはり、ギターがあつた方がいい。ミヒロのレッスンを待つ間に楽器店に行き、安いギターを買つてきた。

コードを覚えていながら弾いてみる。十五年離れていても、若いときに覚えたことはちゃんと残つているものだ。コード名を忘れているものはあつたけれど、ほとんどのコードの押さえ方を覚えている。指一本で全部の弦を押さえられるFは、どうしてもできなくて、昔は飛ばして弾いていた。誰に聞かせるわけでもなかつたから、あの頃はそれでよかつたけど、今回はちゃんと音が出るようにしたい。久々のギターがうれしくて、毎日一時間くらい練習した。でも、やっぱりFの音は出ない。私よりか弱そうな女の子がちゃんと弾いてるのを見たことがあるから、力が足りないせいではないと思う。いつたじどうすればいいのだろう。Fの音が出ないまま、夏休みは終わつてしまつた。

昼休憩、準備室にカツヤとタケシ、そのバンド仲間たちが暇をつぶしにやつてきた。ここづらが来ると、必ず何かいたずらをして帰るので、気をつけてなきやいけない。

「じりー、それはさわっちやダメ！」
ベースの子に気をとられていると、

「ひやあつ、ひやつ、ひや！」

後ろで変な笑い声がした。振り返ると、帰りにポストに入れようと、カバンから少しのぞかせていた封筒を引っ張り出し、カツヤが腹を抱えている。

「シンガーソングライター『ースだつて！』」

「勝手に人のカバンの中身出すな！ いいじゃない、やつてみたいつてだけで、別にプロになりたいとか言つてるわけじゃないんだから。ちょっと自分がバンドやつてるからって、エラそうにするんじゃない！」

恥ずかしいのと腹が立つのとで、そばにあったティッシュの箱をつかんでカツヤの頭をポンポン「なぐつた。悪いという自覚があるのか、ヤツは全く抵抗しないでおとなしく殴られている。このわけのわからぬやつが、文化祭のライブではそれなりの演奏をしていた。まだ何もやってない私は、音楽というステージの上では、こいつりずっと後ろを歩いてるわけだ。かなり悔しい。

「フォークギター買ったんだけどさ、Fの音がどうしても出ないんだよね。」

タケシに聞けば、なにかい練習方法を教えてくれるかもしれない。恥ずかしいけど、思い切つて話してみた。

「Fが出るかどうかが、ギター やるときの最初の壁らしいよ。Fの音が出なくてやめる人多いみたいだから、まあ、がんばつて。」

けつこう親切な言葉をかけてくれたけれど、具体的な解決策は見つからなかつた。誰もがつまずくところだから、練習あるのみ、ということか。

総合学習の時間ずっと寝ていた沼田くんが、服はできそうにないから曲を作るというテーマに変更すると言い出した。まだ何も取り掛かっていないタケシも、一緒に曲を作ることにしたらしい。美術室の隣の音楽室を使うので、私が両方を行き来して見ることになった。

音楽室のカギを開けると、一人がギターを抱えて遊び始めた。いつ見ても寝ていたから、沼田くんが動いている姿を見るのは、初めてかもしれない。

「ちゃんと曲を作つてよ。発表会もあるんだからね。」「はい、はい。」

とタケシ。

「先生、なんか歌つてみてよ。」

いきなりふつてきたのは、ギターを持つて座っている沼田くんだ。話をしたこともない、しかもプロのミコージシャンをめざしてゐる子から歌えなんて言われて、慌ててしまった。

「歌う？ ナンデ私が？」

もしかしたらタケシが何か話していく、どのくらいできるのか見てやろうつてことなのか？ とてもじやないけど、まだ人に聞かせられるようなものじやない。

「それより、沼田くんの歌が聞いてみたいんだけど。」

その状況から逃れるため、自分に向けられた言葉をそのままお返しした。

「イヤダ。恥ずかしい。」

じゃ、人にも言つなよ。そう思つてくるりと向きを変えたとき、ギターの音が鳴り、ささやくような小さな声で、歌がワンフレーズ流れ止まつた。一瞬、誰かがCDを流したのかと思った。

「え？ 今歌つた？」

カツコつけているのか照れているのか、沼田くんは前髪で顔を隠してそっぽを向いている。

「…うまい。」

「もう…」にしつうまいんだって…」

いつも淡々としゃべるタケシが、めずらしく力を入れて言つた。恥ずかしいなんて言つているけど、自分の声を聞いて人がどんな反応をするのか、この子は知つていて、自信を持っている。私に歌えと言つたのも、そう言えば「そっちが歌つてよ」と私が言い返すこと

を予想した行動だったのかもしれない。本当は自分の歌を聴かせたかったのだ。プロになりたいという夢は、彼にとって、手が届かないものではないかもしない。

それから毎週二人は音楽室にこもつたけれど、遊んでばかりで曲ができている様子はない。物まねをしたり楽器をいじつたりしていると、いつもあつという間に一時間が過ぎる。曲を作り、研究レポートも書かなきゃならないのに、この調子だと最後に慌てることになりそうだ。

でも、一人がギターで遊んでいるのを見ていた私には、一つ収穫があった。私のFの押さえ方が間違っていることに気づいたのだ。私は中指の方に引っ張られるように、人差し指のななめ横で弦を押させていた。彼らはひとさし指の腹で押さえている。家に帰つて真似をしてみたら、少し音が出た。もっと力を入れて押さえる練習をすれば、ちゃんとした音が出るようになるだろう。おかげさまで、タケシの言つた最初の壁を何とか越えることができそうだ。

「そろそろ曲を作つて録音してね。」

二学期も終わりに近づいた頃、通信添削の課題を録音するために買った小さなラジカセを、総合学習の授業に持つて行った。音楽室のデッキは使い方がわからないし、自分たちで用意しようと言つても何も持つてこないので、私が用意するしかなかつたのだ。

「小さいラジカセ、かわいいね。」

二人はしばらくそれをつついて遊んでいたけれど、

「じゃ、録音しようか。」

沼田くんがギターを持ち、録音ボタンを押すと、バラードを歌い始めた。タケシと私は雑音を出さないようにじっとして聞く。やはりうまい。一曲歌い終わると、沼田くんは自分で停止ボタンを押した。

「今の曲、自分で作つたの？」

「そうだよ。」

「なんだ、もうできるんじゃん。いい曲だね。」

私がほめたのを聞いて、タケシが笑い出した。

「おい！ バレるじゃないか。」

私の知らないアーティストの曲だつたらしい。でき過ぎてると思つた。

この子がちゃんとしたところで歌つているのを聴いてみたい。文化祭でも歌つたんだろうか。知つてたら聴くんだつたのに。どこかでライブをやることがあれば、見に行きたいけど、卒業までにもうそんな機会はありそうにない。

「沼田くんの歌なら、ライブハウスに行けば聽けるんじゃない？」

「ライブハウス？」

「うん。インディーズでCDも出てるらしいよ。将来有名になつたりしてね。」

彼氏ができたことを報告しに来たマユから、そんな話を聞いた。ライブハウスなんて足を踏み入れたこともなく、インディーズなんて言葉も知らなかつた私は、話の意味がよくわからなかつた。ライブハウスつてことは、お金もりつて人に聞かせてるつてこと？ CDつて、お店で売つてるのかな。本人に聞けばすぐわかるだろうけれど、じつ出てるの？なんて聞いて、間違ひだつたらはずかしい。

ミヒロがレッスンに入つてゐる間、CDショップで暇をつぶしていく、県内のインディーズというコーナーを見つけた。こういうところにあるのかな。情報の授業で作つたバンドのポスターが廊下に貼つてあり、バンド名は知つていた。ざつと見渡したけど、そんな名前は見つからない。やっぱりマコの聞き違いだ。ん？ この、オムニバスつてなんだる？ いろんなバンドの曲を一曲ずつ入れてあるみたい。手ひとつで、並んでいるバンド名を一つずつ見ていくと、

「あつた…」

めずらしい名前だから、同名のバンドとこいつともないだろう。本当にCDになつてるんだ。これは聞いてみなくては。そのCDを買って、ミヒロを迎えに行つた。

高速バスから降りて自分の車に乗り換えると、早速CDをかけてみた。あの子の声だ。知ってる人の声が、こんなふうに流れてくるのは変な感じだった。ビブラーのかけ方が、のこぎりの刃みたい。曲を作ったのは他のメンバーだったけど、ボーカルの持っている良さを生かす曲になつていてる気がした。

「これ、歌ってるの、うちの学校の子なんだよ。」

「へえ、すごいね。」

「ライブ聴きに行つてみたいよね。」

「行きたい、行きたい！」

ミヒロも乗り気になつた。でも、ライブハウスってどんなところだらう。こんな子供、連れて入れるのかな。大ホールのコンサートには何度も連れて行つたことはあるけど、ライブハウスは雰囲気も全然違うだろう。

ういえば、ミヒロは最近妙なことを言い出していた。

「ドラムが習いたい。」

コンサートを見て、ボーカルでもギターでもなく、ドラムがやつてみたくなつたというのだ。私が気にとめたこともない楽器だったから、変わってるなと思った。小さな女の子がドラムを叩くなんておもしろいから、やらせてみたい気もするけど、今はタレントスクールとピアノだけでいっぱいといつぱいだ。

冬休みが終わり、三学期になつた。三年生は一月いつぱいで卒業試験を終え、二月は学校に来なくなる。三年生の授業をするのは、あと三週間ほどだ。授業中、ストーブの周りに五人が集まり、雑談しながら絵を描いている姿を見ていると、急にさみしくなつた。

「なに暗い顔してるんだ？」

カツヤが声をかけてきた。気持ちがそのまま、顔に出ていたらしい。他の四人も、何事かとこつちを向いた。

「別に。」

あなたたちに会えなくなるのがさみしいなんて、恥ずかしくて言

えるわけがない。知らん顔しようと、ぐるりと背中を向けたら、思わず涙があふれてきた。ヤバイ。私は準備室に逃げ込むと、ドアを閉めた。

「ちょっと、泣いてたじやん。カツヤ何したの？」

「え？ オレ？ 今日はなんにも悪いことしてないぞ！」

わけがわからないと慌てている生徒たちの声を聞きながら、何とか涙を止めようと努力したけど、よけいにボロボロあふれてくる。そうしていると、授業時間の終わりを告げるチャイムが鳴った。

「先生、帰るよ。」

サオリが準備室のドアを少しだけ開けて言った。

「うん。ゴメン、ゴメン。もう終わっていいよ。」

「なんで泣いたの？」

準備室に入ってきて、サオリがいつものぶっきらぼうな口調で聞いた。

「…もうすぐ三年が学校に来なくなると思つたらね。」

相手がサオリひとりなら、素直に話すことができる。

「ハン。私たちに会えなくなるのがさびしいんだ。また遊びに来てあげるわよ。」

早口で言つと、サオリは出て行つた。語氣はキツイが、これがサオリのやさしさの表現だ。

会えなくなるのがさみしいという言葉だけでは、私の気持ちは表現しきれていない気がした。私はいつの間にか、自分もあの子たちと同級生のような錯覚を起こしてしまつっていたのだ。

昔から、私は自分の枠の中に他人が入つてくることを極端に嫌がつていた。予告なしで人が訪ねてきても、よほど気を許した人でなければ中に入れない。準備室も最初はそういう空間だつた。でも気がつくと、あの子たちが出入りすることには何の抵抗もなくなつていた。高校時代心を閉ざしていた私にとって、あの子たちは初めて身構えずに付き合えた同級生だったのだ。時間講師に変わるかもしないけれど、私はとりあえず来年度もここにおいてもらえる可能

性が高いらしー。あの子たちが卒業してしまつと、私だけが留年して取り残されるような気持ちになる。

三年生との別れが近づくにつれ、つのつていぐ思いがもう一つあつた。沼田くんのライブを見てみたい。けれど、ライブハウスに足を踏み入れる決心が、どうしてもつかなかつた。いい年をして、若い子たちが集まるライブを見に行きたいと口に出すことにも、かなり勇気がいる。一月になつたら沼田くんに会つこともなくなるから、行くなら今月中に次のライブの予定を聞いて、チケットを買っておかなければ。毎週授業で顔を合わせていたのに、ふざけていいるだけで、ライブの話をしていふところなど見たことがない。むこうからそういう話題が出れば、言ひ出すきっかけができるのだけど。

ついに総合学習の発表会がやつてしまつた。講座」との教室に移動し、全員がレポートを元に一年間学習してきた成果を発表する。うちの講座は「つくる」ということがテーマだから、作ったものをみんなの前で見せなくてはならない。これがこの授業の最後の時間になる。

タケシと沼田くんにも、先週の授業で一応形だけのレポートを書かせたが、かんじんな曲はできあがらなかつた。家でやつてくると言つていたけど、ちゃんとやつてきただろうか。

「録音してきたよ。再生するものある?」

沼田くんがカセットテープを持つてきた。よかつた。できてるらしい。私は持つてきた小さなラジカセを渡した。

「沼田、ありがと。助かったよ。」

タケシは沼田くんがやつてきてくれるのをあてにして、何もやつてこなかつたようだ。

発表は順番に進み、一人の番になつた。レポートを早口で適当に読んだあと、沼田くんは持つてきたカセットテープを再生した。テンポの速い曲が流れてくる。どんな楽器で演奏してるんだろう。いろんな音が聞こえる。曲が終わると、教室に「さすがー」という声

がもれた。こんなことができるんだ。授業中にはそんなそぶりは全く見せなかつたのに。」

「この曲はシーケンサーで作りました。」

最後に沼田くんが言った。シーケンサー？ どんなものなんだろう。聞いてみたかつたけど、この年で今さら音楽をやうつとしていることを沼田くんには言ってなかつたので聞きづらい。どうせ今の私に使いきれるものじゃないし、自分でゆっくり調べてみよう。このとき聞かなかつたために、それがどんなものか、なんとなくわかるまでに一年くらいかかつたりするわけだけれど。

発表会の間の休憩時間、沼田くんがタケシに話していた。

「今度大きなイベントがあつて、県外からすごいバンドが来るんだ。新しいバンド組んだばかりだから、俺たちも気合入つてるよ。」

「へえ、頑張れよ。」

ライブの話だ！ タケシが氣のない口調で答えたので、話はそこで途切れてしまいそうだつた。話に割り込むなら今しかない。

「いつあるの？」

話題が変わる前に、なんとか話にすべり込む。

「一月最後の土曜日。夕方からだよ。」

土曜ならミニヒロのレッスンがある。スクールからは歩いて十分くらいで行ける場所だから、レッスンが終わつて行けば時間的にもちょうどいい。

「その日、近くで子供のレッスンがあるんだ。帰りに行つてみようかな。子供連れて行つても大丈夫？」

いかにもついでに寄るような調子で言つてみた。

「え？ 大丈夫だけど、チケット代は一人分いるよ。」

少しとまどつた様子で、沼田くんは答えた。やはり私とライブハウスはイメージが結びつかなかつたようだ。

「うん。一枚いくら？」

「十五百円。今日はチケット持つてきていから、また持つてくるよ。」

「ヨロシクね。」

やつた！ これで後悔することなく、三年生を送り出すことができる。

講座別の発表会の数日あと、全部の講座から代表を一組ずつ選び、体育館で全体の発表会があった。パソコンを使う講座の代表はサオリ。サオリは、パソコンで描いた絵に短い文章を添えた本を作った。美術の時間に描いた絵も使われている。笑えるページ、ジーンとくるページ。サオリの感性で表現したさりげない絵と言葉が、心に響いてくる。この本はきちんと製本して書店に並ぶものではなく、自分の手元に置く、一冊だけのものだ。彼女の本を見て、私は目からウロコが落ちた気がした。

私は大学時代から、本を出したいという夢を持っていた。だけど、そのための道のりはあまりに遠く、厳しく思えた。こわくて足踏みしているうち、大学時代は終わり、臨時で学校に勤め始めると、そんなことを考えていられないほど忙しくなる。現実の前に、いつも夢は後まわし。いつか必ず、と思いながら、とりあえず今日を過ごすだけで手一杯の時間が流れる。そしていつの間にか、そんな夢を持つていたことさえ忘れていた。

彼女の作った本を見て、私は初めて気がついた。まず形にしなければ、何も始まらないのだ。それがきちんとした本になつて書店に並ばなかつたとしても、やつてみた結果なら納得がいくはず。その結果を受けとめれば、前に進むこともできるだろう。いつかやろうと思うだけで、原稿をまとめるでもなく、もう十五年の歳月が経つてしまっている。このままいけば、死ぬまでそのいつかはめぐつてこない。

本の最後のページには「協力してくれた人たちに感謝」と、何人かの名前が並べてあつた。その中に私の名前もある。ほとんど役に立たなかつたのに、恥ずかしかつた。大切なことに気づかせてもらって、感謝しているのは私の方だ。

二月になり、三年が登校しなくなつた。三年の教室から、遠く離れた美術室まで笑い声が聞こえてきていた休憩時間が、今はシーンとしている。いくらか課題を残した子たちが来ているらしけれど、四階の端の美術室までその気配は届いてこない。時々サオリが顔を見せに来たり、カツヤたちが寄つて嵐のように騒いでいく。帰つていつたあの静寂は、会えなくなつた日の寂しさを予感させ、よけいにつらかった。

にぎやかな一年生の授業を終え、準備室でホッと一息ついた時、ドアの向こうで男子の話し声がした。今は授業中だから、一、二年生ではない。またカツヤたちが来たかな。

「持つてきたよ。」

ドアが開いて、入ってきたのは沼田くんだった。ライブのチケットを持つてきてくれたのだ。タケシも一緒だ。

「ありがとう。一枚千五百円だったよね？」

「うん。…先生って、ライブ好きなの？」

やはり、私が行きたいと言つたことが不思議なようだ。

「コンサートにはよく行くよ。ライブハウスは行ったことないんだけどね。」

「へえ、そなんだ。あ、ライブのチラシ持つてきたからあげるよ。」

「…あ、これ、ライブハウスの壁に貼つてあった！」

レッスンの帰りにライブハウスの前を通ったとき、同じものを見たことがあつたのだ。しつかり化粧をした人たちが「写つた」写真を見て、ミヒロと二人で、

「きれいだね。みんな男の人かなあ。」

なんて話したのを覚えている。まさかその中に自分の知つてる人が写つてゐるなんて思いもしなかつた。これが新しいバンドだつたんだ。それにしても、これじや誰だか全然わからない。いろんな人のライブを見たけれど、これは未知の世界だ。なんだかまた、足を踏

み入れるのが恐くなってきた。ミヒロもいるし…

「俺たち一番目なんだけど、間に合ひつ？」

動搖しているところに、沼田くんが聞いてきた。

「レッスンが終わって急いで行けば、開演時間に間に合ひつと思つよ。」

「よかつた。」

一瞬、沼田くんはお母さんが参観日に来てくれるのを喜ぶ小学生のような表情を見せた。学校の知り合いは他に誰も行かないようなので、結構楽しみにしてくれているみたいだ。やつぱり、今さら行かないとは言えないな。覚悟を決めよう。

「このメンバーで、てっぺんまで駆け上がりしていくんだ。」

沼田くんはいつもの顔に戻り、鋭い目をして言つた。そして、そのまますぐ後に、

「半年後には消えてたりしてね。ハッハッハ！」

えらそうにふんぞり返つて、わざとらしい大声で笑う。その高笑いの裏に、先のわからない世界に向かっていく不安が見えた気がした。

ライブの日。レッスンが終わって会場の前まで行くと、外には行列ができていた。黒いドレスで決めている子、顔を包帯でぐるぐる巻きにした子、普段見ている街の風景とは明らかに違う世界がある。今日は五つのバンドが出ることになっているから、それぞれ、自分が見に来たバンドに合わせてオシャレをしているのだろう。ほとんどが若い女の子で、親子連れの私たちは場違いな感じだ。だけど、別にジロジロ見られるわけでもなく、それほど居心地悪さも感じないで、列に並んで中に入った。

初めて入ったライブハウスの中は、思ったより狭く、暗かった。

大ホールのコンサーントしか知らない私には、そのステージは窮屈に感じられる。今日は三百人くらい入ると、沼田くんは言つていた。

この広さで三百人なら、ぎゅうぎゅう詰めになるのだろう。

私たちの後からも、どんどん人が入ってくる。どこにいればいい

のかわからぬけれど、後ろが詰まってきたから、少しづつ前に寄つていいく。開演の頃には右のスピーカーの前辺りに落ち着いていた。暗いステージの上に人影が動き、照明が変わる。いよいよ始まるようだ。

いきなり飛び出した音が、耳に衝撃を与えた。スピーカーから一メートルくらいしか離れていないのだ。これはヤバイ。ミヒロはまだ小さいから、耳を傷めてしまつかもしれない。でも、もうその場所から動ける状態ではなかつた。

「見えないよ！」

私の服を引っ張りながら、ミヒロの口がそう動いた。仕方なく抱き上げる。抱いたまま、曲に合わせてかすかに身体を動かしていたら、驚くべきことに、ミヒロは眠り始めた。この音の中でどうして眠れるんだ。ずっとしり重くなつてきたけれど、降ろすわけにはいかない。私は初めからクタクタになつてしまつた。

一つ目のバンドが終わる。次は沼田くんたちだ。彼が出るときには起こさなきや、何しに来たのかわからない。

「起きてよー始まるよー！」

ミヒロがなんとか起きて目をこすつていると、後ろの人たちが少しずつ前につめてきて、私たちもじりじりと前に押し出されていく。沼田くんたちのほうが、さつきのバンドより人気があるといつことだろうか。一度ミヒロを降ろして休みたかったけど、降ろしてしまつたら、狭くて抱き上げることはできなくなつてしまふだろう。私一人の力で抱いているのは、もうムリだつた。

「しつかりつかまつて！」

ミヒロに自分で抱きつくように言い、体勢を変えながら、腕や足を順番に休ませる。そつやつて頑張つてゐるうち、真つ暗なステージで忙しく準備していた人たちの動きが感じられなくなつた。いよいよ始まるようだ。

照明がつき、メンバーがステージに現れると、ものすごい歓声。

沼田くんのステージでの名前を叫んでいる子もたくさんいる。こん

なに人気があるんだ。曲が始まると、客席はますます盛り上がった。絵の具で描いたような派手な化粧をしているけれど、歌っているのは間違いない沼田くんだ。力強い声。学校でふざけて歌つていたときは比べものにならない。

今まで別世界の人がいる場所だつたステージの上に、同じ教室で時間を過ごした子が立つてゐる。たくさんの機材がある狭いステージの上を、ぶつかることなく身軽に動き回る沼田くん。その動きに合わせて、前の方にいる女の子たちがそろつた振り付けで手を動かしている。日常生活から離れ、ここで疲れや嫌なことを洗い流し、また日常に帰つていぐ。この子たちはそうやって、沼田くんたちに助けられているのだるう。私が思つていたよりもずっと先を、沼田くんは歩いていた。私は生きているうちに、今沼田くんがいる場所までたどり着くことができるだらうか。熱い空氣の中、私は冷静にその様子を眺めていた。

五曲演奏して、沼田くんたちのバンドは終わつた。後ろの人たちが散らばつていき、スペースに余裕ができたので、私はすぐにミニヒロを降ろした。腕に感覚がない。疲労はピークに達してゐた。せつかく來たのだから最後までいたかつたけれど、もうそんな元気はない。ミニロもこれ以上この音の中にいさせないほうがいいだらう。次のバンドの最初だけ見て、もしそれほど好きじゃなかつたら帰ろう。ドリンクを飲んで、後ろの方で三つ目のバンドを一曲聴き、会場を出た。

「カツコよかつたね。私もいつかここでライブやりたいな。」

圧倒されている私と違い、ミニロは簡単にこんなことを言つてのける。先の長いコイツにとつては、それも難しいことではないのかもしない。現実に、この子には一月ほど後、タレントスクールの大きな発表会が迫つてゐる。

三月一日。ついに卒業式がやつてきた。一月頃から少しずつ心の準備をしてきた別れの日だ。びっくりすることも多かつたけれど、

たくさんのこと教えてくれた生徒たち。さすがのあの子たちもおとなしく式を終え、放送係の私が流した音楽の中、ゆっくりと退場を始めた。職員は花道を作り、生徒を拍手で見送る。私もそこに加わるため、二階の放送室を飛び出し、階段を駆け下りた。

胸に花をつけ、卒業証書を手にした子たちが、次々と体育館を出ていく。お世話になつた先生と握手をする子、涙をぬぐいながら通り過ぎる子、最後に目立つてやろうと面白いカツコをして笑わせる子… 授業やクラブで関わった子に、「私は一人ずつ「頑張つてね」と声をかけて送つた。サオリはいつものように淡々とした態度を装つて通り過ぎたけれど、きっとたくさんの思いを隠しているに違いない。

最後のクラスになり、沼田くんがやつてくる。先生たちの前までもぐるど、両手を上げて大きく振り、笑いをとつた。私も一緒に笑つただけで見送る。他の子たちに贈つた「頑張つてね」という言葉は、彼には言えなかつた。迷つて足踏みばかりしてきた自分。私は表現する人間として、彼に全くかなわない。頑張らなきやいけないのは私の方だ。

私は彼をうらやんでいた。夢をつかんだ彼を想像してではなく、夢を追いかけている今の姿がうらやましかつたのだ。生きていくとき、結果なんてあまり問題じやないのかもしれない。結果がどうなるうど、自分の持てる力を使い切ることが大切なのだ。結果というのは後からついてくるもの。何もしなければ、当然何の結果も出ない。私の一番の後悔は、「何もしなかつた」ことなのである。

卒業式の数日後、また例の、卒業できない夢を見た。高校生と一緒に一年過ごしても、やはり私は卒業することができない。私はこのまま、一生高校を卒業できないのだろうか。でも、この学校に来る前とは、確実に何かが変わつている。卒業生たちとの出会いが、卒業する大きなチャンスを作つてくれた気がするのだ。あとは私がどう行動するか。チャンス生かすことができるかどうかだ。

高校生とともに過ごし、だけど、高校生と同じではない自分。未

完成な十七才とたいして変わらない、へたすれば、とある十七才よりも未熟な三十六才。もし今、やつと見つかった夢を持つて高校生に戻れたなら、私はどんなふうに生き直すだろうなんて無意味なことを考えたこともある。今なお何も行動できない私は、たとえもう一度高校生に戻れたところで、同じ後悔を繰り返すだけだろう。過ぎた青春を悔やんでいる暇に、今何かやってみた方がいい。この年になつたつて、まだ生きているのだ。自分の気持ち次第で、いつだって自分の足元にスタートラインを引くことはできる。

だけど、具体的に何をすればいいかと考えても、はつきりした答えが出てこない。音楽をやると決めたけど、今は曲を作つて通信添削してもらつてているだけ。頑張つて踏み出したつもりだつたけど、これではまだダメなようだ。人をうらやむ気持ちがあるということがその証だつた。人に伝えなければ作った意味はない。人前で歌うこと、それをしなければ、前に進むことはできないのだろう。そのチャンスを、どうにかしてつかみたい。

大ホールで行われる発表会が近づき、ミヒロのレッスンはかなり回数が増えていた。ダンスを覚えていなくて、ミヒロはみんなにかなり迷惑をかけているようだ。リズム感はあるといわれるのに、振り付けの決まつたダンスをみんなと合わせて踊るのは、ミヒロに向いてないらしい。

私の方は、来年度の仕事がどうなるか、気が気でない時期になっている。「来年度は時間講師としてお願いする可能性が高いのですが、それでも来てもらいますか?」と、一度校長先生からお話があつた。授業の数にもよるけれど、非常勤になれば、去年までのよう他の仕事もかけ持ちしないと生活できないだろう。それでも、置いてもらえるなら来年も勤めさせてもらおうと思い、「はい。」と答えた。一年勤めて勝手がわかつてきたり、せつかく人間関係がでてきた生徒たちとも離れたくない。そして何より、何かが変わりそうな予感に出会えたこの場所で、その予感を現実のものにしたか

つた。給料が減つたつて、元の生活に戻るだけ。一年間月給をもらえただけでもずいぶん助かったのだ。

だけど、これはまだ決定ではない。もし何かの都合で予定が変わり、もうこりないと言われたら、急いで四月からの仕事を探さなければならぬ。はつきりしたことがわかるのは三月の終わり。正採用の先生たちの転勤がわかる日だ。

「よいよその日、

「校長室に来てください。」

校長先生から内線が入つた。覚悟を決めて校長室のドアをノックする。

「失礼します。」

頭を下げ、校長室に入ると、

「引き続いて臨時採用で来てもらうことになりましたよ。」

少しでも早く伝えようと、校長先生は前置きもなく用件を告げられた。

「え？ 時間講師じゃないんですか？」

「ええ。今、県から正式に連絡がありました。今年と同じですよ。すぐには何を言われたのかわからないほど、私は意外な決定に驚いていた。もう一年、フルタイムで高校生たちと過ごすことができる。生活に困らないだけの収入も保証される。今そう告げられたのだ。

「ありがとうございます！」と、よろしくお願いします。

「こちらこそ、よろしくお願ひしますよ。」

うれしい誤算にて、重くのしかかっていた来年度への不安は消えていった。

発表会まで一週間をきり、ミヒロは毎日レッスンすると喜んで渡された。片道一時間のスクールに通うのは、ほとんど一日がかり。毎日つれて通っていたのでは、私は仕事に行けない。かといって、一番できていないミヒロがレッスンを休むわけにはいかない。いまさら出ないことにしたら、立ち位置など全部変えなくてはならなくな

つて、みんなが混乱する。せっかく練習してきたのだから、本人も出たいだろう。どうしていいかわからず困り果てていると、

「発表会の日まで、うちでミヒロちゃん預かってあげるよ。」

同じキッズクラスのお母さんが声をかけてくれた。申し訳ないと思つたけれど、どうしようもないでお願いすることにした。

発表会当日、会場に行くとミヒロはもうリハーサル中で、会えなまま本番を迎えることになった。ちゃんと振りを覚えただろうか。頑張れの一言くらいかけてやりたかったけれど、もうどうしようもない。時間になり、ステージの幕が上がった。

プログラムが進み、いよいよミヒロたちの出番だ。カラフルな衣装で、キッズクラスが登場してきた。不安だったダンスもなんとか覚え、いい笑顔で自分の役割をこなしている。しかし、ヤバイ。踊りが進むうち、衣装の下にすその長い白いシャツを着ているのがのぞき始めた。うわあ……見る見るそれは目立ちだし、最後には全部出てしまつた。すごい格好だ。衣装に着替えるときはシャツを脱ぐよううにと、いつも言つていたのに。本人は全く気づかず、どびきりの笑顔。またみんなに迷惑をかけてしまつた。

次の出番は大きい人たちと一緒に。大勢で輪になつて、踊りながら出てきた。円の奥のほうに行つたとき、いきなりミヒロの姿が消えた。しばらくするとまた現れた。どうやら転んで起きたらしい。大きい子たちの陰になつていたから、客席の人はほとんど気づいてないだろう。そ知らぬ笑顔で輪の中に戻つたのでホッとした。

最後の出番は全員で大合唱。迫力ある歌声だ。練習は大変だったけれど、やり遂げた満足感が、たくさんの顔からあふれている。何ヶ月もかけて作つたステージに、やがて幕が下りた。

楽屋に迎えに行くと、出演した子たちが肩を抱き合い、涙を流していた。もらい泣きかもしれないけれど、キッズクラスも全員、目を真つ赤にして泣きじやくつている。

テレビを見たり本を読んだりして、感動して泣いたことはある。

だけど私自身が何かをやり遂げた感動で涙を流したことなど、三十

六年生きてきて一度もない。体育祭や文化祭で燃え尽き、涙する生徒たちを、いつもうらやましいと思いながら見ていた。そんな涙を、ミヒロはたつた六才で大ホールのステージに上がり、経験したのだ。たくさんの人々に迷惑をかけながら、なんとかやり遂げさせてもらつて、本当によかつたと思った。

「ライバルは17才 メチャメチャ成長が遅い私の記録 下」

に続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4502d/>

ライバルは17才 メチャクチャ成長が遅い私の記録 上

2010年10月9日15時13分発行